

■ 川本喜八郎プロフィール

- 1925年：1月11日渋谷区千駄ヶ谷に生まれる
- 1946年：東宝映画撮影所美術部勤務
- 1951年：飯沢匡に見いだされ人形絵本、CM製作などを始める
- 1963年：チェコ・プラハに留学、人形アニメの巨匠イジィ・トルンカに師事
- 1968年：「花折り」をはじめ、「鬼」(72)、「道成寺」(76)、「火宅」(79)など、人形アニメーション映画を発表
- 1982年：NHK人形劇「三国志」人形美術担当
- 1988年：日中合作人形アニメーション「不射之射」監督
- 1990年：日本チェコ合作人形アニメーション「いばら姫またはねむり姫」監督
- 1993年：NHK人形歴史スペクタクル「平家物語」人形美術担当
- 1995年：日本アニメーション協会会長就任
- 2003年：連句アニメーション「冬の日」監督
- 2005年：人形アニメーション「死者の書」監督
- 2007年：長野県飯田市に川本喜八郎人形美術館オープン、館長就任
- 2010年：8月23日逝去
- 2012年：6月4日渋谷ヒカリエ8階川本喜八郎人形ギャラリーオープン



Puppet Master

川本喜八郎人形ギャラリー 瓦版

かわらばん

三国志・平家物語 vol.7



劉備 玄德



曹操 孟徳



孫権 仲謀

■ 「川本喜八郎人形ギャラリー」

川本喜八郎(1925～2010)は、渋谷区千駄ヶ谷に生まれ育ち、人形美術家・アニメーション作家としてNHK人形劇「三国志」、「平家物語」などを手掛け、世界的にも活躍し、多くのファンを魅了してきました。渋谷区では芸術や文化を、気軽に身近で楽しむアートスポットとして、川本喜八郎の生み出した人形をテーマに応じて、常設展示してまいります。

- ◆ 入館料 無料
- ◆ 開館時間 午前11時～午後7時
- ◆ 休館日 無休(ただし年末年始、展示入替期間は除く)
- ◆ 住所 渋谷区渋谷二丁目21-1 渋谷ヒカリエ8階
- ◆ アクセス

東急東横線・田園都市線、東京メトロ半蔵門線・副都心線「渋谷駅」15番出口直結。
JR線、東京メトロ銀座線、京王井の頭線「渋谷駅」と2F連絡通路で直結。



那須 与一



源 義経

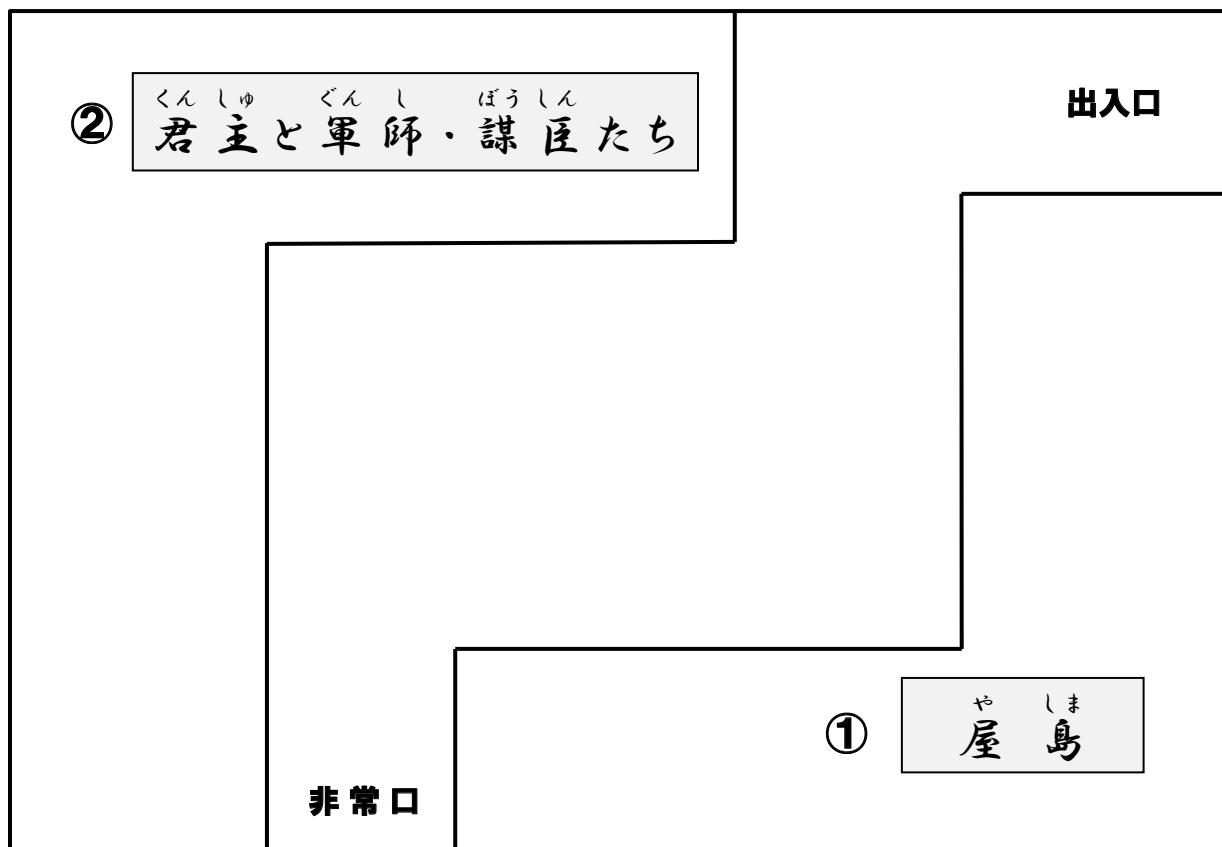


武蔵坊 弁慶

解説・監修:平井 徹(慶應義塾大学講師)

渋谷区文化振興課

■ 現在の展示内容



① や屋 しま 島

一ノ谷から凱旋した源義経の評判は日増しに高まった。後白河法皇の覚えめでたく義経は叙任され、兄頼朝に無断だったことから不興を買ったが、山陽道へ出撃した範頼（義経の異母兄）の部隊が平家を攻めあぐね、立ち往生する状況にしびれをきらした頼朝は、ついに義経に平家追討の任を下した。当時讃岐国屋島の平家軍は手薄だった。密偵によってそうと知った義経は好機を逃さず嵐をおして摂津から阿波へ渡海し、わずか150騎の寡兵で周辺の民家に火をかけて大軍の襲来と見せかけ、背面から果敢に奇襲をかけた。海上からの攻撃しか予想していなかった平家軍は周章狼狽し、陣を捨てて海上へ逃れ去り、四国での拠点を使い、一路最後の決戦地、壇ノ浦へと落ち延びた。一ノ谷での勝利からちょうど一年、寿永4（1184）年2月のことであった。

展示している人形

源義経、武蔵坊弁慶、鶴殿隼人助、田辺湛増、さくらの局、田口教能、佐藤継信、桜間ノ介能遠、那須与一、玉虫、那須大八郎、帥の局、平時忠、朱鼻伴卜、金売り吉次

② 君主と軍師・謀臣たち

「三国志」の最大の魅力は、軍師・謀臣たちの活躍にあるとあって過言ではない。曹操における荀彧、孫権における周瑜、劉備における諸葛亮らの行動は、彼らを用いる主人たちの器量と相まって、時代を形成する原動力となった。中国の戦闘は国土が広大なため長期化するのが常である。日本のように一度の戦闘が「天下分け目」となり、国の命運を左右するのとは対照的で、したがって、直接的な戦力よりも、政治力・経済力・外交力のほうがはるかに重要だった。彼ら謀臣たちは、主君のために行動指針を打ち出し、命を賭けて論陣を張った。その意味で、「三国志」の時代は、智者の優れた論理だけが世界の運命を決定する、まさしく「人間の時代」であったのだ。

展示している人形

董卓仲穎、李儒、呂布奉先、王允子師、陳宮公台、袁紹本初、許攸子遠、劉璋季玉、法正孝直、劉備玄德、諸葛亮孔明、龐統士元、曹操孟德、郭嘉奉孝、程昱仲德、荀彧文若、孫権仲謀、周瑜公瑾、魯肅子敬、諸葛瑾子瑜

コラム 徹の部屋

監修者・平井徹の…「三国志」「平家物語」にまつわるミニ講座 「三国志」編 vol.4

呂布の謀臣陳宮の生涯は皮肉なものでした。川本喜八郎先生もその屈折した人物像を魅力的にとらえておられ、近年、彼を主人公にした小説も出版されています（吉川永青著『^{ながはる}戯史三国志 我が糸は誰を操る』）。逃亡中の曹操との一段は、京劇の名作「捉放曹^{チュウオファンツァオ}」で劇化され、曹操の名セリフ「^{むし}寧ろ 我 人に負くとも、人 我に負くこと^な母かれ」もおなじみです。フランス文学者の桑原武夫氏（1904～88）は「『三国志』のために」（全集第3巻所収）というエッセイの中で陳宮の最期を取りあげ、武将たちばかりでなく、彼のような知識人が活躍するところが日本の軍記物にない魅力であるとの主旨を述べています。ちなみに、京劇での曹操は有数の悪役であることは周知のとおりですが、それら一連の演目を「罵曹劇^{マウツァオチユイ}」と呼びます。近代軍閥の一人曹錕^{ソウコン}（1862～1938）が姓を同じくするところから「罵曹劇」を上演禁止にしたという面白いエピソードも伝えられています。